

方言表現論の最前線

友定 賢治

1. はじめに

方言研究は、方言の中核的・構造的な部分を対象として言語体系を明らかにすることにとどまらず、新たな展開をみせている。次の3点をあげたい。一つめは、言語の周辺部分とされてきた、感動詞やオノマトペなどの研究が盛んになっていることである。二つめは、言語の運用面に注目した、言語行動や談話展開の研究である。そして三つめは、方言によるコミュニケーション上の障害や効果、地域社会の活性化への寄与、そして、次世代への継承と教育といった実践的な課題を扱う研究で、実践方言学、臨床方言学などと呼ばれている。

これらの新たな研究をリードする小林(2017:7)は、研究の意義について、

- (1) 従来、知られていない世界の地域差を発見する楽しみがある。
- (2) 言葉を操る発想法レベルで方言について考えることができる。
- (3) コミュニケーションギャップを解消する手がかりが得られる。

をあげている。

ただ、感動詞やオノマトペなどに関して、従来知られていない地域差を発見することができたとしても、周辺の事象についての新たな知見にとどまるのでは、研究の基本的なパラダイムは変わらず、研究の意味は限定的であり、方言研究の新たな展開は見えてこないであろう。これらが周辺的ではない方言(言語)研究の在り方とはどのようなものなのかを模索していくことが必要である。

本シンポジウムでは、(2)の「発想法レベルで方言について考える」ことが主たる目的である。

2. 発想法レベルでの方言表現論研究

シンポジウムに関わる「言葉を操る発想法レベルで方言について考えることができる」(上記(2))という面で、まず注目したいのは、母方言の大阪ことばについて論じた、尾上(1999)である。方言を、

一般に方言というものは、そのような(内容略 筆者)土着性という目で見るのでなく、その地域の人々の対人接触の様式、自己表現の様式、思考様式、行動様式の現れとして理解することが必要であろう。(同書 16p)

と捉え、「地域の文化を体現するもの」(同 16p)として、さまざまな大阪ことばを説明している。発想法にもとづく方言表現論の注目すべき成果と考える。

方言研究として発想法の地域差を明らかにするために、言語行動や表現を分析対象にするが、問題になるのは、地域イメージを実証する研究の方法論が確立されていないことである。篠崎・中西(2017: 83)は、次のように述べる。

イメージ形成の背景検証のための、言語研究上の着眼点や検証方法の未成熟、それに伴うデータ不足から地域差の背景となる理論構築が困難だったという事情もある。具体的に言えば、何を、どれほど、どのような方法で比べれば、地域ごとのイメージ形成につながる言語的特徴の実証につながるかが分からなかったということである。

このような中で、話しぶりやものの言いかたを、言語的発想法として捉え、話し手の個性ではなく地域性があるという立場から、方言研究として位置づけたのが、小林隆・澤村美幸(2014)『ものの言いかた西東』(岩波書店)である。「言語的発想法」を以下のように述べている。(164p)

ものの言い方に関する志向や好みを、ここでは「言語的発想法」と名付けることにしたい。あらためて言えば、言語的発想法とは、物事をいかに言葉で表現するかという人々の考え方のことである。言葉と向き合う話し手の姿勢が言語的発想法であると言ってもよい。

そして、以下の7つを挙げている。(165p)

- ①発言性 あることを口に出して言う、言葉で何かを伝えるという発想法。
- ②定型性 場面に応じて、一定の決まった言い方をするという発想法。
- ③分析性 場面を細かく分割し、それぞれ専用の形式を用意するという発想法。
- ④加工性 直接的な言い方を避け、手を加えた間接的な表現を使うという発想法。
- ⑤客観性 主観的に話さず、感情を抑制して客観的に話すという発想法。
- ⑥配慮性 相手への気遣い、つまり配慮を言葉によって表現するという発想法。
- ⑦演出性 話の進行に気を配り、会話を演出しようという発想法。

そして、これらの発想法の発達している地域と未発達の地域を、次のようにしている。(170p)

発達地域	近畿地方
準発達地域	西日本(九州を除く)
	関東地方(特に東京)

準未発達地域 東日本(東北を除く)
九州・沖縄地方
未発達地域 東北地方

ただ、やむを得ないことではあるが、考察に用いているデータはさまざまで、多人数のアンケート調査結果があり、一つの談話資料で論じているものもある。発想法を説明するデータの問題は残ると思われる。

また、「関東地方(特に東京)」は、東日本のなかでは異色で、準発達地域になっている。これが、都市性によるとすれば、単に地図上の位置がそのまま地域差になるものではないことになる。また、都市性が要因であるとするれば、住民の都市意識が高いと感じる仙台市などは、周囲と異なるのだろうか。さらに、極端な例では、離島であっても、役場などが集まっている地区の住民は、周りの地区に対して強い都市意識を持っていることがある。これらが一様に周囲と異なる様子を見せるのか、都市意識とひとくくりには出来ず、例えば都市の規模によって、言語行動への影響は一様ではないのだろうか。

小林・澤村(2014)の、この7つの言語的発想法と発達地域・未発達地域の提言は、今後検証されなければならないが、小林編(2021)はその実践である。小林(2021:336)は所収論文を整理した後、

小林・澤村(2014)で指摘した地理的傾向は、いくつかの課題の発見とともにここでも概ね確認することができた。

としている。

3. 方言表現論の最前線—シンポジウムの内容—

シンポジウムでの3氏の発表をみておきたい。

3.1 オノマトペの意味・使用法の地域的差異 川崎めぐみ

オノマトペの地域性については、語形のちがいや談話中での使用頻度などの考察が中心であったが、表現論的な考察も見られるようになってきている。友定(2015)は、会話中のオノマトペの使用頻度に地域性があるという指摘とともに、大阪はオノマトペ使用が多いというイメージがあるが、それは、尾上(1999:126-133)で挙げられている「ポチャーン、ねこ池落ちよってん」のような使い方が、多いというイメージにつながるからではないかと述べた。

また、齋藤ゆい(2007)では、宮城県と高知県の各一地点の比較がなされているが、宮城県方言は語数が多く、具体的な特定の場面に結びついている語が多いのに対して、高知県方言は、語の種類は少ないものの、各語の応用力がたかいと説明している。

さらに小林(2010)では、全国調査に基づいて、大声で泣くときの言葉が、東日本で

はオノマトペで表現することが多いと、表現発想に関わる指摘をしている。

川崎の発表は、方言の談話資料を中心に、東日本(特に東北)と西日本の特徴的な用例を見ることで、どのような違いがあるのか、オノマトペの表現発想の傾向を明らかにし、表現論的な考察をさらに深めた。西日本を「共感」のオノマトペ、東日本を「説明」のオノマトペとし、次のように述べている(シンポジウム発表資料より)。

- 東日本(特に東北) 被修飾動詞が抽象的、あるいは伴われない例が特徴的。動詞を修飾するというよりも、オノマトペ単独ですべてを描写しよう(伝えよう)としているように感じられる。
- 西日本 動詞を中心として、オノマトペはあくまで修飾語としての役割を果たしている。そのためか、描写よりも勢いや程度を表す用法がよく見られる。一方で、スル動詞化したオノマトペや、一般語彙との境界にあるオノマトペも多用される。

これは、オノマトペの表現性に関する重要な指摘である。尾上(1999:126-133)が、大阪の特徴的な表現としてあげる「ボチャーン、ねこ池落ちよってん。」といった使い方は、田守・スコウラップ(1999:86)で「文外独立用法」とされているが、川崎は、「落ちよってん」と動詞があることが前提とされる点で東日本の特徴とされるものと同じではないという。

3.2 「断り」にみる配慮表現の動向 岸江信介

岸江は、依頼を断る場面での言い方を、全国規模でアンケート調査し、50歳以上867名、大学生743名から得たデータを、統計的・言語地理学的な観点から分析し、さまざまな意味公式からみた地域性を明らかにした。まさに、「はじめに」であげた「(1)従来、知られていない世界の地域差を発見する楽しみがある。」という結果になっている。

言い方に幅がある配慮表現では、その地域の言い方を特定の言い方だけに決めることは難しいであろう。地域的な特徴を見出す有効な方法の一つは、多人数調査によるデータによって、優勢な言い方を見ていくことである。

さらに、中高年層と大学生を調査したことで、年齢差も見えている。例えば、「ごめん」という謝罪表現について、岸江は、もとは西日本の表現(中高年世代)であったが、大学生世代では全国を席卷する謝罪表現となったと報告している。これは、いわゆる共通語化であろうか。そもそも方言だという意識があり、共通語が何であるか認識できるであろうか。表現法レベルでの共通語化も検討すべき課題であろう。

岸江は、これらの問題を考える多くのデータを示している。

3.3 配慮の発想と運用 椎名渉子

配慮表現だけに限らず、表現の地域性が、地図上の位置だけでなく、都市性の差にもよることが報告されている。椎名は、都市という点で性格が類似する地域にどのような差があるのかを、東京と関西の比較から考えている。分析結果として、同じ都市とよ

ばれるところであっても、これまでの言語行動研究において指摘されている地域性が強く出るのではないかと述べる。調査項目に、

【評価場面】友人が建てた新築の家について自分の評価が低いとき、友人に対して何と言うか

というのがあり、回答に東西差があることが示されている。(発表資料より)

立派な家建ったなー！うらやましいわ！（大阪府高槻市）

新しい家、建てたんだって、おめでとう（東京都八王子市）

関西で「うらやましい」が用いられることについて、権名は、「うらやましい」により、話者と聴者とのあいだに序列が生まれ、話者が下手に出ることができる。家へのマイナス評価（前提としてある話者の心的態度）の顕在化回避のために、自分が下位にくる序列を提示するという発想が「うらやましい」によって実現されているのではないか。このような自己開示による序列化（自分が下位）は、自分が望ましい・好ましいと思っていない事態に対する場合の一種の配慮的戦略として用いられるのではないかと説明する。

4. 方言表現論をすすめるために—3氏の発表から—

シンポジウムでの3氏の発表は、方言表現論研究の現在の到達点を示すとともに、今後の研究を進めるうえでの示唆に富むものであった。特に注目したい点を3点あげる。

4.1 表現法を捉える

川崎の発表は、オノマトペの表現発想の傾向をとらえようとした試みで、文や談話でどのように実現するか注目したものである。オノマトペだけでなく、感動詞研究などでも要求されることであろう。

これは、「表現法」という捉え方をした藤原与一につながるのではないかと考える。藤原は、例えば『方言研究法』（1964 東京堂）のなかで

他との関連・統合のもとで見られる文法、ふくらみのある文法は、表現法とよばれるのがふさわしい。表現の法という意味で、表現法と呼ぶ。(同 226p)

文表現の形は、ことばの生きていることのわかる最小限の形である。生きたことばをとらえていくとなったら、どうしても文表現本位にとらえていくことを考えなくてはならない。表現の場面で、一文以上のまとまりをとらえていくのである(同 148p)

と述べる。

ただ、藤原は、例えば「文は訴えである」といった定義にも見られるように、難解と

か特異なものとされたが、方言表現論の進展のためには、今一度見直すことが求められるのではないか。

4.2 調査法とデータの検討

具体的に方言表現論を進めるうえで、まず問題になるのは、調査法とデータのことである。オノマトペの使用は個人差があり、また話題によって、出現しやすいものとそうでないものがある。依頼を断る場面の配慮表現データを収集しようとしても、そのような場面に会って自然傍受できる機会はごく稀であろう。

そこで、場面を設定して、土地の方に演じてもらうという方法も行われている。上手に演じてくださる話者の方もいるが、この方法で多くのデータを収集するのは大変である。

データ数を増やすためにアンケート法にすると、回答が実際に用いられるものか、規範的な性格の回答かが問題になる。

一方で、データ数が限られると、個人的なものかその土地のものかの判別が問題となってくる。

言語地理学では、話者は、生え抜きの人で、少なくとも言語形成期まではその地で生活し、それ以後も外住歴が5年以内といった、「典型的な話者」の回答を、語彙が中心であるが、その土地のものとする。このような話者が回答した配慮表現のデータは、個人的なもので、その土地のものとはできないのであろうか、それともその土地のものとしてよいのであろうか。このような問題の検証を通して、その土地のデータを、より効率的に収集する方策を検討する必要がある。

4.3 「地域性」の内実の検討

椎名の発表は、都市性という点で共通する東京・大阪を中心とする関西が、もともとの地域性を有しているという、小林・澤村(2014)をさらに進める考察である。発想法の解明をさらに深めるためには、小林・澤村(2014)の7つの言語的発想法は、きわめて魅力的であるが、さらに様々な観点からの検討が求められる。

発想法の地域性が生じる理由についても考察が必要である。近畿でこれらが発達するのは、なぜなのか、社会構造や歴史からという説明がなされているが、尾上(1999)の説明や、それぞれの地域での自己と他者の捉え方や、それにかかわる内と外の把握の仕方などを明らかにしていく必要がある。

5. まとめ

方言表現論は、今後の発展が期待される分野である。九州方言では、

- ・コナイダジュワ イサゲー アータ アメン フッタデスナー。(この間中はたいそう あなた 雨がふりましたねえ。熊本 『全国方言資料』 第6巻九州編)

・アー オハヨー アータ(ああ おはよう、あなた。 同上書)
のように、文中・文末で「あなた」と呼びかけることが多く聞かれる。藤原(1986:486)は、「九州方言の風土性」と説明しているが、その風土性というのは、九州方言の表現発想法ということではないか。なぜ「あなた」と呼びかける表現が生じるのかが説明できれば、表現発想法の地域差が明らかになり、方言学の新たな展開につながると思う。

参考文献

- 尾上圭介(1999)『大阪ことば学』(創元社)
小林隆(2010)「オノマトペの地域差と歴史 —「大声で泣く様子」について—」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房
小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎(2017)『方言学の未来をひらく』ひつじ書房
小林隆(2017)「方言学の新分野」小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎『方言学の未来をひらく』ひつじ書房
小林隆編(2018a)『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房
小林隆編(2018b)『感性の方言学』ひつじ書房
小林隆編(2021)『全国調査による言語行動の方言学』ひつじ書房
齋藤ゆい(2007)「方言オノマトペの共通性と独自性—宮城県旧小牛田町と高知県安芸郡奈半利町との比較—」『高知大國文』38
篠崎晃一・中西太郎(2017)「言語行動の東西差—準備調査から傾向を探る—」『東京女子大学紀要「論集」』67(2)
田守育啓・ローレンス=スコウラップ(1999)『日英語対照研究シリーズ オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版
友定賢治(2015)「感性の表現の地域性—オノマトペで考える—」『表現研究』102
西尾純二(2012)「日本語の配慮言語行動の社会的多様性」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房
野田尚史・高山善行・小林隆編(2014)『日本語の配慮表現の多様性』くろしお出版
藤原与一(1986)『方言文末詞<文末助詞>の研究(下)』春陽堂
三宅和子・野田尚史・生越直樹編(2012)『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房

(県立広島大学〈名〉)